

応用生態工学会ニュースレター
Ecology and Civil Engineering Society (ECESJ)
2005年(平成17年)11月24日(木)発行

No.31

(発行所) 応用生態工学会事務局 〒102-0083 東京都千代田区麹町 4-5 第7 麹町ビル 25 号室
TEL:03-5216-8401 FAX:03-5216-8520 E-mail: see@blue.ocn.ne.jp HP: http://www.ecesj.com/
(発行者) 応用生態工学会(編集責任者: 幹事長 江崎保男, 事務局長 島崎由美)

Contents

1	はじめに	1
(1)	役員改選!	1
(2)	来年度大会日程決定!	3
(3)	2006年から会誌編集委員長交代	3
2	第9回大会報告	3
(1)	総会報告	3
(2)	第9回大会を終えて	4
(3)	発表賞	5
3	理事会報告	6
4	幹事会報告	8
5	委員会報告	8
(1)	交流委員会	8
(2)	会誌編集委員会(拡大)	9
6	海外派遣報告	9
7	主催・共催行事報告	10
(1)	日韓合同セミナー	10
(2)	札幌だより	11
(3)	中国現地ワークショップ in 山口	13
8	韓国での動き	15
9	日本学術会議について	15
10	NPO 法人応用生態工学研究会始動	16
11	新刊紹介	16
12	今後の行事・募集案内	16

1 はじめに

(1) 役員改選!

1) ご挨拶

新会長: 山岸哲 ((財) 山階鳥類研究所長)



本学会は、工学者と生態学者が知恵を出し合って環境について考えようとする画期的な学会ですが、当初の「研究会」発足から数えて、来年はいよいよ10周年を迎えることになりました。その

節目の年に、広瀬前会長より会長職を引き継ぎ、

その責任の重さを痛感しております。

本年度の年次大会の発表内容を見るまでもなく、本会が年々着実に発展を遂げていることは衆目の一致するところです。底辺が広がり、どのような研究が「応用生態工学の研究」かが共通認識されだしたと感じます。特に、コンサル関係者の研究がレベルアップし、定番とっていい研究が定着してきたと思います。これに対して、いわゆる「おもしろい研究」がやや少ないと思ったのは私一人でしょうか。「おもしろい研究」を引っ張っていくのは、やはり大学のプロの研究者の仕事です。それにより、「定番研究」の質がさらに向上するのだと思います。10年経過して、この学会で育ってきた若手の大学研究者も次第に出始めています。そうした方々の力を結集して、次の10年頑張っていきたいものです。

さて、新任会長の抱負ですが、ささやかでも、次のことは、任期中にやり遂げるつもりです。1) 選挙制度の改正。2) 関連学会との提携。3) 幹事会の活性化、の三つです。1)については、完全なオープン選挙が理想なのですが、それができない場合は、少なくとも会長・副会長は会員の信任投票を経て決定するようにしたいと思います。2)につきましても、英文誌の相乗りが行われているにもかかわらず、そこに参加している学会(特に国内)がほとんど相互に連携をとっていないのが実情です。まずは、お互いの学会大会に役員を相互に送り合い、互いの理解を深めることが、会員の増加にも繋がるのではないのでしょうか。以上のようなことを、ともすると理事会任せになりかけている幹事会で論じ合ってほしいと思います。そして実りある10周年を迎えようではありませんか。会員の皆様のご協力を切にお願いいたします。

最後になりましたが、4年間にわたり広瀬前会長には大変ご苦勞様でした。会員を代表してお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

2) 応用生態工学の発展とは - 幹事長就任にあたって

新幹事長：江崎保男
(兵庫県立大学／兵庫県立人と自然の博物館)



2005年の大会から幹事長に就任しました。2000年の琵琶湖大会以来、応用生態工学会から遠ざかっていましたので、久々に見聞きした数々の講演は、かなりインパクトのあるものとして伝わってきました。それは、一言

でいえば、応用生態工学の方法が一定の方向性をもって来たということですが。

私は生態学者なので、生態系への人為（土木など）のかかわり方（メカニズム）を科学的に解析し、生態系の保全に資する人為の加え方を提案する方法論として、応用生態工学を捉えています。そういった意味での応用生態工学に、5年前と比べて、かなり明確なスタンスがみえてきたと感じているわけです。そのポイントはたとえば、物理環境と生物のハビタットの関係の明確化、そしてデータの徹底した定量化にあると思います。

ただし、生態学者として、一抹の不安を感じています。実は生態学そのものが、現在その危険をはらんでいるのですが、現象の記載が非科学的なもの、あるいは古くさいものとみられる傾向です。実験的な試み、あるいはいわゆる実証主義は、一見非常に科学的な響きと臭いを感じさせるのですが、その出発点には常に克明な観察と意味のある記載があらねばならないということです。そして生態系（たとえば河川）そのものが、広域的な生物間・生物-環境間の複雑な関係性のもとに成り立っているものですから、これを研究対象とする科学者は常に全体を見渡す視点をもっていなければなりません。これをぬきにして、現象の断片だけを対象とした「科学的な」姿勢は、ある意味で非常に危険であるといわざるをえません。こういったことを考えていると、医学とのアナロジーにすぐ行き当たります。私は、見ず知らずの医者には絶対に世話になりません。殺されるかもしれないからです。外科は外科、内科は内科、その中でも、心臓は心臓専門医、胃腸は胃腸の専門医。現代の医者も多く（特に中年以下）は、部分のこと

は知っていても、全身のことはわかりません。そんな医者に大事な体をあずけるわけにはいかないのです。人の体は、臓器や筋肉・神経系などが有機的にむすびついた全体として存在しているのであり、部分だけを見て治療するという一般的に流布しているやり方は明らかに間違っています。

このことは応用生態工学の母体である生態学と工学（特に生態学？）の問題であって、応用生態工学はその影響をこうむっているだけなのかもしれません。否、それではいけないのだという考えが一方であるかと思えます。このあたりにこれからの応用生態工学を考えるヒントがありそうな気がします。幹事長として真剣に考えたいと思いません。

3) 会長を終えて

前会長：廣瀬利雄



2期4年の会長職を終えた。就任時“自分でよいのか”と自問自答もしたし、“就任は止めておけ”と忠告して下さった方もいた。兎にも角にも任期を終えることができたというのが実

感である。

事務局の依頼により会長時代を顧みた。

- 学会と研究会（日本学術会議学術研究団体登録）： 学術的な学会と幅広い研究を強調する研究会のどちらの名称にするか悩んだ。結果的に学会で良かったと思っている。
- 学会とシンポジウム： 学会として長良川河口堰、有明海を採り上げた。マスコミに採り上げられ、かつ学術的情報の乏しい事例を学術的知見で問題点を整理し、社会に提示することは学会の使命と思った。ただ、火中の栗を拾う危険は覚悟すべきである。
- 公開シンポジウム（大会時）： 我が応用生態工学を海外に普及していただくことを目途として始めた。しかし海外の知見を聞くシンポジウムになった愧みがある。本年の第6回目「比較応用生態工学」と副題をつけていただいたのは、原点に立って考えていただきたいとの願いであった。
- 地方組織の充実： 目下10地方研究会が組織され活動している。

- 英文誌コンソーシアムへの参加
 - 会誌投稿規程の検討
- 今後、山岸新会長の下、学会の益々の発展を祈念して止まない。

(2) 来年度大会日程決定!

来年度平成18年(2006年)の大会は、東京において9月29日(金)から10月1日(日)の日程で開催されることになりました。主な会場は東京大学弥生講堂を予定しています。

10周年の記念大会として早速準備検討が始められました。(事務局)

(3) 2006年から会誌編集委員長交代

現会誌編集委員会委員長の中村教授は2002年の第5巻から4年に渡って編集委員長を務められ、このたび2006年の第9巻からは埼玉大学の浅枝教授に交代することになりました。

2006年1月からの原稿の投稿先は次のとおりです。お間違えの無いようお願いいたします。

応用生態工学会誌編集委員長 浅枝 隆
〒338-0825
埼玉県さいたま市桜区下大久保 255
埼玉大学大学院理工学研究科環境制御工学専攻
TEL 048-858-3563 FAX 048-858-3563
e-mail see-ce@blue.ocn.ne.jp

2 第9回大会報告

(1) 総会報告

事務局長 島崎由美

2005年9月30日(金)10:30~11:20に第9回総会を開催しました。まず冒頭で、国土環境(株)渡辺晋氏が総会議長に選出され、議事進行が行われました。以下主要事項の報告を行います。

なお、総会資料は学会ホームページに掲載しています。

1) 報告事項

平成16年度の事業報告として、一般経過、会員状況、実施行事、理事会・委員会等の会議、会誌編集状況などについての報告が角野幹事長から行われ、承認されました。

2) 決議事項

平成16年度の決算報告が角野幹事長から、監査報告が加藤監事から行われ、原案どおり可決され

ました。続いて2005年度(平成17年度)の事業計画および予算案について幹事長から説明が行われ、原案どおり可決されました。

また、「委員の任期について2年とするが再任を妨げない」とする規約の改正が廣瀬会長から提案、説明され、原案通り可決されました。

さらに、本総会は役員改選期にあたるため、候補の公募および次期役員候補推薦委員会の推薦による会長、副会長候補、次期役員候補推薦委員会の推薦による理事候補が理事会の了解を経て総会に提案され、また、理事会の推薦による幹事長、幹事の案も総会に提案され、いずれも原案通り可決されました。

選出されたのは以下の方々です。紙面の関係でご所属のみ記載します。

会長	山岸 哲	(財)山階鳥類研究所
副会長	近藤 徹	(財)水資源協会
	谷田一三	大阪府立大学
	辻本哲郎	名古屋大学
理事	荒井秋晴	九州歯科大学
(50音順)	沖野外輝夫	早稲田大学
	大矢 暁	応用地質(株)
	大村達夫	東北大学
	角野康郎	神戸大学
	鹿野久男	(財)休暇村協会
	島谷幸宏	九州大学
	竹村公太郎	(財)リバーフロント整備センター
	竹門康弘	京都大学
	春田章博	(株)環境・グリーンエンジニア
	福岡捷二	中央大学
	古川整治	水計画研究所
	森下郁子	(社)淡水生物研究所
	森 誠一	岐阜経済大学
監事	加藤 昭	(財)ダム水源地環境整備センター
	田畑日出男	国土環境(株)
幹事長	江崎保男	兵庫県立大学/人と自然の博物館
幹事	岩崎敬二	奈良大学
(50音順)	内田朝子	豊田市矢作川研究所
	加賀谷隆	東京大学
	風間ふたば	山梨大学
	鎌田磨人	徳島大学

- 萱場祐一 (独)土木研究所自然共生
研究センター
- 熊野可文 (株)建設技術研究所
- 清水康行 北海道大学
- 角 哲也 京都大学
- 関根雅彦 山口大学
- 高野安二 (財)ダム水源地環境整
備センター
- 日置佳之 鳥取大学
- 星野義延 東京農工大学



写真左段: David Dudgeon 教授, 上左: 谷田教授
(主旨説明), 上右: 森教授, 下左: 古米教授, 下
右: 萱場センター長

(2) 第9回大会を終えて

大会実行委員長 井上修((株)建設環境研究所)

第9回大会は、東京九段の科学技術館で9月30日から3日間にわたり開催された。

一日目は、総会と公開シンポジウム。今回の公開シンポジウムは、『比較応用生態工学－生態系・風土そして文化』と題して、香港大学の David Dudgeon 教授をお招きして、日本の研究者・実務者との議論がなされた。応用生態工学会は、これまで国際的ネットワーク構築を目的としてシンポジウムを仕掛けてきたが、日本と気候、地形等の条件が大きく異なる欧米研究の紹介に留まったのではないかという意見もあった。このため、国内に応用生態工学が広く浸透してきた今こそ、アジア・モンスーン地域という日本と共通性の高い風土、文化を持つ諸国と欧米との比較を通じて、応用生態工学の発想に基づく河川管理、生態系の保全と再生について再考したいと企図したものである。総合討論の中で、自然特性の他に、文化・社会特性を考慮した上で、環境評価や河川管理を考えていく必要があることなど、共通性とそこにある差違とが見えてきた点があった。また、古米弘明教授より粒状有機物の研究事例が紹介され、河川管理の視点として、水の連続性、土砂の連続性、有機物の連続性の3点が議論されるなど、研究領域の広がり議論にも成果がみられた。



二日目と三日目は、9セッションで合計31題の口頭発表と、合計35題のポスター発表がなされた。参加者は283人であった。熱心な議論の中で、河川から流域あるいは沿岸域への対象フィールドの広がりがみられた他、モデリングや遺伝的解析の現場適用への発想など、応用生態工学が根付き、応用の現場に向かおうとしている、という印象を受けた。その一方で、河川が多い傾向は今回も継続した。今後の課題であろう。



ポスター発表: 熱心なやり取りと混雑する会場



二日目の夕方、ポスター発表終了後から、ちょっと異例の学会誌編集委員会主催のミニシンポジウム「応用生態工学研究の作法－生態学と土木工

学の習慣を乗り越えて」が開催された。



設立以来、来年で10年。多くの論文が投稿されてきたが、生態学と土木工学、ベースが異なる研究者間で“文化”の違いがあり、若干の混乱が見られた。このミニシンポジウムは、両分野の習慣を乗り越え、応用生態工学独自の研究論文の書き方、研究方法のあり方などを議論する、統一への試みであった。夕方開催だったが、非常に活発な議論がなされ、両分野での論文作成作法の違いが明確にされた一方、そのどちらでもない“応用生態工学チルドレン”を自認する人たちが確かに拡大・定着してきていることも話題になった。10年の重み、というものを実感した瞬間だった。

最後に、大会の運営については、公開シンポジウムでは谷田一三副会長(大阪府立大学教授)に大変お世話になりました。また、会場整備・運営は、関係する多くコンサルタントのスタッフにご協力いただきました。篤く御礼を申し上げます。

<多摩川永田地区の自然再生事業を見学して>

藤谷俊仁 (株)建設環境研究所

10月1日、エクスカーションとして、公開シンポジウムのために招聘した香港大学 Dudgeon 博士に見ていただくために、畠瀬さん(財団法人自然環境研究センター)、通訳の林さんとともに、多摩川の永田地区で河川生態学術研究会が行っている自然再生事業の現場を見学しました。

1970年代以降、永田地区では上流側に設置された治水・利水施設によって流水が安定し、土砂供給が減少すると同時に、河道の固定化が進んだためハリエンジュ林が拡大し、礫河原の面積が縮小しました。このことに伴い、礫河原に固有なカワラノギク、カワラバッタ等も個体数を減らしまし

た。そこで、礫河原に固有な生物の保全と扇状地の川にふさわしい多様性保全のため、国土交通省京浜河川事務所と河川生態学術研究会の協働によって、ハリエンジュの伐採と表土の剥ぎ取り、高水敷の掘削および礫河原造成とカワラノギクの播種が行われました。現在は、その効果の検証のためモニタリングがされているところです。現状として、在来の河原性の植物が出現するようになりました。ただ、その一方で帰化植物なども多いため、ボランティアによって、外来種の抜き取りによる植生管理も行われています。

現地では、畠瀬さんの説明を聞きながら、表土を剥ぎ取った個所、礫河原造成個所などを歩き回りました。表土を剥ぎ取った個所では、表土がかなり深く削り取られたことが分かりました。カワラノギク播種域では、カワラノギクの開花期に少し早いようでしたが、数輪が開花しているのを見ることができました。また、多くの株が順調に育っていることが確認できました。このあと、川べりまで移動し、土砂供給の低下による河床の低下を防ぐために、堰の上流側に堆積した礫を堰の下流側に投入していることなどを説明していただきました。残念ながら、カワラバッタは見つけられませんでした。

Dudgeon 博士は、大いに興味をもって、説明に耳を傾けておられました。博士は感想として、やっていることの方角性は正しいが、河床が固定されているなかで、もともと動的な礫河原の環境をいかに維持し続けていくかということに心配するとともに、大きな期待を抱いておられるようでした。

現場へ行く途中、首都高速で渋滞に巻きこまれたときは、ちゃんと御案内できるか不安になりましたが、Dudgeon 博士にはエクスカーションを楽しんでもらえたと思います。私にとっても、世界的に著名な研究者と触れあえることは、得難い経験でした。このエクスカーションを企画された大会関係者の皆様に感謝いたします。

(3) 発表賞

選考委員長・幹事長 江崎保男

1) 「口頭発表賞」の発表

今年もレベルの高い発表が多く、きびしい競争になりましたが、独創性や発表内容の評価に加え、応用生態工学に寄与する価値ある研究であるか否かという観点から今回は以下のように選考しまし

た(発表順).

1. 「ネコギギ(ナマズ目ギギ科)の生息地評価～環境要因の構成と他種との関係を含めて生息地を評価する試み～」一柳英隆((財)ダム水源地環境整備センター), 森誠一(岐阜経済大学地域連携推進センター), 渡辺勝敏(京都大学大学院理学研究科)
2. 「遺伝子解析によるイワナ在来集団の判別」中村智幸((独)水産総合研究センター中央水産研究所内水面研究部), 山本祥一郎(同), 久保田仁志(栃木県水産試験場), 山家美穂(名護市)
3. 「洪水によるシナダレスズメガヤの除去効果及びそれに対するヤナギ群落の阻害効果」福岡泰斗(徳島大学大学院工学研究科建設工学専攻), 鎌田磨人(徳島大学工学部建設工学科)

1の研究は、物理的な環境要因に加えて他種との関係を含めた研究であり、複数の空間スケールから評価を試みている点が高い評価をえました。

2の研究は、目的が明確で実効性があることが高く評価されました。また、流域規模まで広げた適用が可能であることも強い印象をあたえました。

3の研究は、課題としては目新しさに欠けるものの、河川工学的予測の限界を認識した上で大出水を利用したバランスのよい研究として評価されました。

2) 「ポスター発表賞」の報告

優れた研究が多く、今回も僅差の決定になりましたが、一般投票部門賞4題(3位が2題)、選考委員会賞2題、選考委員会奨励賞2題が選ばれ、大会の最後に表彰式が行われました。

<一般投票部門賞>

- 第1位「ダム下流河川における支川合流が、河川底生動物群集に与え得る影響」片野泉(独立行政法人土木研究所自然共生研究センター)
- 第2位「深泥池の浮島は水温変動を緩和する」田崎紘平(京都大学大学院工学研究科)
- 第3位「夜行性希少魚ネコギギの昼間の棲み場所ーリーチスケールにおける潜在的な生息場所の推定ー」田代喬(独立行政法人土木研究所自然共生研究センター)
- 第3位「夜行性希少魚ネコギギの昼間の棲み場所ー微小生息場所の物理特性ー」佐川志朗((株)

ドーコン)

<選考委員会賞>

- 「中流域魚類生息環境と河畔林の管理」伊木千絵美((株)北海道技術コンサルタント)
- 「川づくりの評価について～「BARCIデザイン」をふまえた評価の事例～」渡辺恵三((株)北海道技術コンサルタント)

<選考委員会奨励賞>: 今後の研究の進展が特に期待されるものとして選定

- 「水田生態系への配慮手法に関する基礎的研究ー水田を主たる生息場とするカエルを対象としてー」加藤布美子(北里大学水利環境学研究室)
- 「木津川と宇治川の流量によるFPOMの流下距離変化」加藤布美子(北里大学水利環境学研究室)



一般投票部門賞は、研究の新鮮さや実用性などが、選定理由であるように思われます。

選考委員会賞2題では、管理や評価といった実用性が重んじられました。今回新たに設けられた奨励賞では、河川以外の研究を今後充実させたいとの選考委員の強い期待が現れています。

来年度は10周年記念大会であり、もりだくさんのメニューのなかでポスター発表をどう充実させるか検討したいと思います。

3 理事会報告

応用生態工学会の理事会は9月30日の総会を挟んで第29回と第30回が開催されました。

【第29回理事会】

- 開催月日: 2005年9月10日(土) 14:00~16:20
 会場: 食糧会館(千代田区麴町4丁目)
 出席: 廣瀬, 小倉, 谷田, 大矢, 鹿野, 竹門, 福岡, 松田, 三島, 森下, 幹事長角野,
 事務局: 島崎(記録)
 委任状提出による出席: 玉井, 池淵, 井上, 佐藤, 桜井, 島谷
 欠席: 阿部, 矢原

1) 報告事項

一般経過報告、会員状況報告等のほか、総会に提出する平成16年度事業報告、決算報告および平成17年度事業計画、予算案について英文誌関係の予算以外は疑義無く了承され、総会に提出することとなった。英文誌については購読会員数が目標に達していないことから、不足分の購読費の支出を検討する必要があるが、コンソーシアム側の決算案が間に合わず、後日資料を送付することになった。(後日の意見収集により、購読者数確保を優先とし、不足が生じれば予備費から支出することで総会に提出することになった。)

2) 国際シンポジウムの開催について

ICLEE 全体の購読者増加および原稿確保の努力の一環として、2006年度に大阪で国際シンポジウムが計画されていることを1st Circular 案を提示して報告した。当学会からの実行委員として、副委員長に角野幹事長、経理・財務に島崎が入る他、学術担当として中村編集委員長を含む2名、総務担当として大阪地域の研究会メンバーに依頼することとなった。

3) 規約改正について

これまで、委員会活動に参加する会員の任期に規程がなかったことから、委員任期を2年、再任を妨げないという主旨の規約改正案を承認し、総会に諮ることとした。

4) 役員改選について

会長・副会長・理事・監事・幹事長・幹事の候補案について手続きを確認し、総会に諮ることとした。

5) 科学技術振興機構(JST)関連

JSTへの会誌「応用生態工学」著者抄録利用は、JSTの申し出を受け有料(1件420円)で承諾することとなった。また、J-Stageの利用について全文公開を会員に限定する案については、否定的な意見が多く、他学会の状況も調べてさらに検討することとなった。

6) 2006年度大会について

次年度大会については10周年記念事業も含めて次期の理事会で検討していただくこととなった。

【第30回理事会】

開催月日:2005年9月30日(金)11:30~12:30
会 場:科学技術館第4会議室
出 席:山岸, 谷田, 近藤, 辻本, 荒井, 大矢,

角野, 鹿野, 島谷, 竹村, 竹門, 春田, 福岡, 古川, 森下, 森, 幹事長江崎, 事務局:島崎(記録)

欠 席:沖野, 大村

総会資料, 前回(第29回)理事会の資料及び議事録, 共同英文誌の状況および平成17年度予算案に関する追加説明資料を基に, 主として前回理事会議事録の内容を事務局から説明し, 新任理事会メンバーに学会の現状の概要を説明したあと, 検討, 決定した主な事項について報告いたします。

1) 共同英文誌について

- 購読者を増やす努力を続ける。広告収入で補えればよいが, それにたよることを前提にするべきではない。不足が生じた場合に予備費から支出するのではなく, 購読者数が目標に達するまでは必要な補助的な支出を行うとともに, ICLEE 事務局負担金も学会として共同で英文誌発行に参加している以上, 払うべきであり, 予算として立てておくべきであろう。

- 学生購読会費を設定することについては, 当学会独自に行うことは保留する。

2) 各委員会担当理事について

- 編集委員会:谷田副会長
- 普及委員会:竹門理事
- 交流委員会:辻本副会長
- 情報サービス委員会:未定
- パートナーシップ委員会:島谷理事
- 将来構想委員会:メンバーの再検討を幹事会に依頼

次年度大会および10周年記念事業について

- 次年度大会を10周年記念大会とし, 場所は東京で行う。
- 会場を大学の施設を利用し, 実施体制も大学に頼る部分を増やしたい。日程は会場の都合によるが9月下旬から10月初旬の週末にかけてとする。

(事務局注:その後の会場探しの段階で, 2006年9月29日(金)から10月1日(日)に決定しています。)

- シンポジウムテーマ(10周年記念講演会), 研究発表会, 総会等のスケジュールおよび10周年記念事業委員会の設置については幹事会が原案を作成する。
- 研究発表の時間枠・場所枠による制限は設けたくない。(エントリーは原則全部受け入れる)

4 幹事会報告

開催月日：2005年10月2日(日)12:20～14:20
 会場：科学技術館サイエンスホール第一控室
 出席：江崎, 鎌田, 萱場, 熊野, 関根, 高野,
 事務局：島崎(記録)

■谷田副会長オブザーバー参加

欠席：岩崎, 内田, 加賀谷, 風間, 清水, 角,
 日置, 星野

冒頭で、会長および3副会長連名の「幹事の皆様へ」が幹事長から紹介され、理事会から幹事会に活発に活動して欲しいとの希望が伝えられた。

1) 新体制における担当について(委員会等)

- 副幹事長は：事務局等との連絡上、東京在勤の方が都合が良いであろうことから熊野幹事を選出。
- 委員会担当：会長・副会長からの「幹事会の皆様へ」を受け、担当幹事制を復活する。
- 情報を共有し、当事者意識を高めるためにも、各委員会「担当」幹事のほか、幹事全員がいずれかの委員会に委員として属するようにしたほうがよい。本人からの希望も入れて決定する。
- なお、各委員会の委員人事は委員長の判断となっていることから、幹事が委員になることについては、幹事会から各委員長への依頼ということにする。担当幹事の案は以下の通り。

☆編集委員会：鎌田幹事(担当)

☆普及委員会：関根幹事(担当)

☆交流委員会：萱場幹事(担当)

☆情報サービス委員会：風間幹事(担当)

☆パートナーシップ委員会：熊野副幹事長(担当)。

☆将来構想委員会については委員長を含め構成メンバーを新たに検討する。

2) 次年度大会および10周年記念事業について

- 10周年記念事業の委員会を立ち上げる。理事会・編集委員会メンバーを含めた体制と実施内容の原案を早急に作成し、12月9日の理事会に提案する。
- これとは別に大会、特に研究発表会の運営についてはいままでコンサルタントのメンバーを中心とした実施体制であったが、今後は大学関係者等を加えた(或いは大学を中心とした)実行委員会体制で行なうべきとの考えがある。
- 上記の検討のため、拡大幹事会を11月21日(月)に開催する。

5 委員会報告

(1) 交流委員会

開催月日：2005年7月21日(木)17:30～19:10
 会場：応用生態工学会事務局
 出席：辻本, 森, 谷田担当理事, 意見提出による出席：内田, 萱場, 寺本, 事務局島崎(記録)

1) 平成17年度国際交流海外派遣者選定について

- 本年度の応募は1名であった。これは応用生態工学分野として興味深い海外での学会が本年度は少なかったことが原因と考えられる。
- この応募について審査したところ、募集要項の資格および適性を派遣研究者として適当であると認められた。
- 本年度の派遣費用の予算は第28回理事会で30万円が認められているが、渡航費・参加費およびこれまでの助成実績を勘案し、助成額は10万円が適当であると決定した。
- 派遣研究者
 赤松良久(東京工業大学大学院)

2) 次年度の派遣事業予算と募集時期について

- 2006年度の派遣事業について、予算の決定は総会事項であるが、30万円の予算を理事会に承認いただき、早めの募集を行いたい。
- 学会幹部が参加する応用生態工学会として関連の深い特定の学会に絞り、民間コンサルタント技術者へも間口を広げ、必ずしも発表を伴わなくても良いことを含むツアーのような形態の募集を行いたい。

3) 交流委員会の行事について

各地で実施する現地セミナーは普及委員会マターとして、それぞれの地域に特有なテーマで企画・実施していただく。交流委員会としては、「応用生態工学」の向心力を発揮させたい。

当面のテーマとして、ターゲットを「農地-水田」と河川の連携・交流に置き、生物および物質循環の面などからのアプローチを試みるセミナーを企画したい。

また、各委員にそれぞれセミナーを企画してもらいたい。昨年は矢作川・三河湾接点領域現地ワークショップを清野委員が企画したので、森委員にも企画を考えて欲しい。

4) ICLEE2006への実行委員派遣について

国際英文誌の編集については編集委員会マター

として進めているが、日韓の参加学会合同シンポジウムを2006年に大阪で実施することになった。

ICLEE (International Consortium of Landscape and Engineering) に参加している当学会としても協力するにあたり、実行委員の人選は会長からの依頼により交流委員会において検討いただくことになった。

シンポジウム実行委員会(委員長:森本幸裕・京都大学農学部)からは、事務局の島崎が財務・経理担当に当たるほか、副委員長の派遣を依頼されている。シンポジウムの内容が森林再生あるいは緑地再生ということと、開催場所が大阪であることから、交流委員会メンバー内のみでは適切な人選が出来ず、角野幹事長(神戸大学)に依頼することとした。

(2) 会誌編集委員会(拡大)

開催月日:2005年10月1日(土)12:20~13:00

会場:科学技術館サイエンスホール第一控室

出席:

編集委員:中村, 浅枝, 池内, 鎌田, 島谷, 清野, 藤田, 玉井担当役員(前)

専門編集委員:荒井, 角野, 五道, 長崎, 中坪, 古川

事務局:島崎(記録)

1) 投稿状況:数と今後の特集について

事例の投稿が増えており、受理済みの原稿も貯まっている。8巻2号は「野生生物特集」の予定であるが、原稿の集まりは若干遅れている。但し、上記の通り原稿が集まっているのでミニ特集としても発行できる状態にほぼなっている。

その後の特集として浅枝委員提案および島谷委員提案(ニュースレターNo.29参照)を進める。

2) 編集委員長の交代と編集委員新体制について

8巻2号の編集をもって中村委員長は退任し、後任を浅枝委員とする。このことは第29回理事会、第30回理事会にも提案、承認済。事務的には2005年度末で交代とし、2006年1月からの投稿先は浅枝教授の住所とする。

ただし、英文誌LEEについては当面中村委員長が担当する。

また、編集委員のメンバーについては新委員長の意向で考えていただき、12月末までに体制を整える。可能であれば、12月9日予定の次の理事会に報告する。

6 海外派遣報告

XXXI IAHR CONGRESS

東京工業大学 赤松良久

本学会の海外学会等への派遣助成を受け、XXXI IAHR(the International Association of Hydraulic Engineering and Research) CONGRESSに参加してまいりました。その報告をさせていただきます。

本大会は2年ごとに開催されており、河川・水文・湖沼・海岸といった水工学に関連する分野の基礎的研究から応用研究まで多岐にわたる研究の発表が行われています。今年度は韓国ソウル市内のConvention and Exhibition Center(COEX)で開催されました。今回の大会の主要テーマは「未来のための水工学:選択と挑戦」であり、以下の六つのサブテーマで論文が集められました。

A. 水文情報, 水理モデリングおよび水理データ: 競争あるいは統合?

B. 都市および産業域における流れ: 分析, 管理および安全性

C. 水環境の保護と修復: 水質と生息環境

D. 水資源危機への対処

E. 沿岸開発, 物理および生態系の脆弱性

F. 淡水の危機

大会は5日間に渡り、途中に一日のテクニカルビジットを挟み、4編の基調講演と490編の口頭発表および159編のポスター発表が行われた。

<基調講演>

基調講演の内2題は最新の水理モデルと衛星から得られデータや発達した観測機器によって得られる詳細なデータの有効利用について深く考えさせられるテーマでした。現在、水工学の分野ではシミュレーションモデルが急速に発達するとともに、衛星から得られる情報などが用意に手に入る状況にあります。今後、それらのデータをどのように用いていくかということは非常に重要な課題であると感じました。特に西オーストラリア大学のインバーガー教授が講演の中で紹介して下さった現地観測を行いながらその場でその結果を用いて数値シミュレーションを行い観測データと数値計算結果の相互比較を行いながら調査を進める方法は非常に興味深いものでした。

<口頭発表>

私はCテーマの「河川および高水敷内でのエコハドロリクスおよび生息場モデリング」を題材

としたセッションでの発表を行いました。23編におよんだ発表の中で生物・生態に関する議論が展開されているのは9編程度と非常に少ないものでした。その他の14編の発表もエコハドロリクスと関係ない研究ではないのですが、流れや土砂輸送の議論にとどまっていた。本セッションを見る限りで日本では盛んに行われている魚類の生息評価などは国外の水工学に関わる人たちの間ではあまり行われていないように感じました。特に、ヨーロッパでは水工学の分野では未だに基礎的な水理の研究が盛んに行われているようです。基礎的研究の重要性はいうまでもないのですが、Cテーマ「河川と高水敷内でのエコハドロリクスおよび生息場モデリング」の中で基礎的な研究にとどまっているのは少し残念でした。しかし、種間競争や流れの影響を取り入れた高度な貝類の分布予測モデルの研究も見られ、今後の研究の参考になる有意義なセッションでした。

<全体を通して>

水工学を基盤とする IAHR の学会においてもエコハドロリクス的な視点は明らかに浸透してきていますが、実際に生物や生態に関する調査を深く行うことはほとんどされていないように感じました。水工学を学んでいる研究者の視点からの生物や生態に関する研究は今後ますます必要になると考えられ、IAHRの学会においてもそのような研究が多数発表されることが今後の環境を見据えた水工学の発展に必要不可欠です。日本の応用生態工学会のような組織は海外にはなく(学会で知り合った海外の研究者に聞いた限りでは)、日本はエコハドロリクスに関してはかなり進んでおり、我々がイニシアティブをもって IAHR におけるエコハドロリクスを盛り上げていく必要があると感じました。

最後になりましたが、国際会議参加という貴重な機会を与えて頂きましたことを本学会員の皆様方に厚く御礼申し上げます。

7 主催・共催行事報告

(1) 日韓合同セミナー

戸田祐嗣(名古屋大学)

平成17年7月25日(月)に名古屋大学VBLホールにて「第3回河川環境の復元に関する日韓セミナー(応用生態工学会共催)」が開催されました。7月26日(火)には日韓セミナーの参加者を中心

として長良川河口堰、自然共生センター等の見学会が実施されました。7月27日(水)には、再び名古屋大学VBLホールにて「日韓水辺環境の国際情報ネットワークに関するワークショップ」が開催されました。以下、応用生態工学会に共催いただいた日韓セミナーに加えて、エクスカージョン、ワークショップの内容を報告いたします。

1) 第3回河川環境の復元に関する日韓セミナー

本セミナーでは、日韓の河川工学、生態学の研究者・技術者が会し、両国での河川生態に関する最新の研究成果や先進的な取り組み事例に関する発表が行われました。本セミナーは一昨年に徳島大学、昨年は韓国 Kyung-Hee 大学にて開催され本年度で3回目を迎えましたが、回を追って順調に発展し、今回は日本側から30名、韓国側から38名の参加がありました。

セミナーでは、12件の口頭発表(日韓それぞれ6件づつ)に加え、11件のポスター発表(日本:4件、韓国:7件)が行われ、河川環境復元事業(4件)、植生や河川生態系を含む河川地形の特徴(6件)、河川生物の生息環境(8件)、人間活動と河川環境の関係(5件)といった内容について、活発な議論が繰り広げられました。



2) エクスカージョン

セミナーの翌日は、セミナー参加者を中心としたエクスカージョンが開催されました。エクスカージョンには58名(韓国側参加者38名)の参加があり、以下の行程で実施されました。

名古屋発 → 長良川河口堰 → 木曽三川公園 → 木曽川ケレップ水制群 → 自然共生研

究センター → 名古屋着

各訪問先では、説明者と参加者の間で活発に意見交換が行われました。自然共生研究センターでは、現在、韓国 Gyeongju 付近での建設計画が進んでいる大規模実験河川に関連して韓国側研究者から多くの質問があがり、また、人工洪水のデモンストレーションでは、実験水路とは思えない迫力ある流れを目の当たりにすることが出来ました。



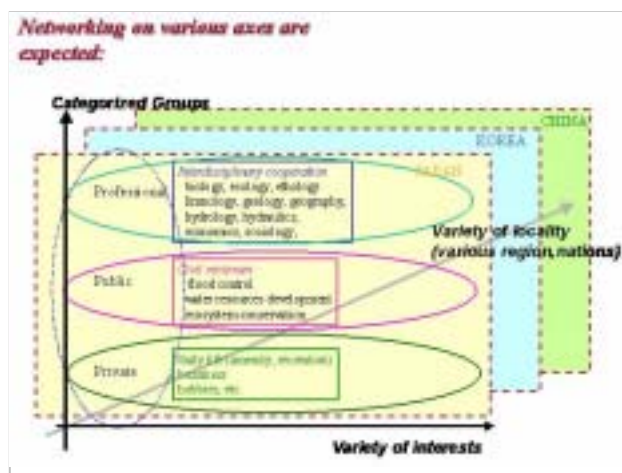
3) 日韓水辺環境の国際情報ネットワークに関するワークショップ

7月27日(水)には水辺環境に関する国際情報ネットワークの構築を目的として、以下のプログラムでワークショップが行われました。

- ワークショップ趣旨説明(リバーフロント整備センター)
- 日韓セミナー(7/25)の報告(Chon Tae-Soo(釜山国立大学), 戸田祐嗣(名古屋大学))
- 水辺再生の国際情報ネットワーク検討会からの活動報告(白川直樹(筑波大学))
- 韓国の水辺再生の国際情報ネットワークに関する報告(Woo Hyoseop(韓国建設技術研究院))
- 総合討論(コーディネータ:辻本哲郎(名古屋大学))

総合討論では、Professional, Public, Private といった所属する組織の多様性 (Variety of Categorized Groups), それぞれの持つ興味の多様性 (Variety of Interests), 国や地域による場所的な多様性 (Variety of Locality) といった3つの軸に対して、どのように情報ネットワークを構築していくかが議論されました。また、アジア地域での情報ネットワーク構築に際しては日本、韓国、中国が主導的役割を担うであろうことから、中国を含めた議論を行う必要があることが確認さ

れました。



4) セミナー、エクスカージョン、ワークショップを通じて

3日間のイベントを通じて、国の違いのみならず、河川工学・生態学、研究者・技術者、シニア・若手といった垣根を全く感じることない活発な意見交換が行われました。これは、徳島大学で行われた第1回の日韓セミナーから一貫して、参加者全員が運営組織のメンバーであるかのように全員で協力して作り上げ続けてきたセミナーであるからだと思われ、その果実として変に形式に拘らずに、本当の意味での人的交流や意見交換が行われるセミナーが実現できたものと思われま

す。各日の夜に行われた交流会では、昼間の熱気をそのままに、河川環境に関する真面目な議論からお互いの生活の話まで終わることなく語りました(交流会での食欲とお酒の量は、韓国側参加者の圧勝に終わりました)。交流会を通じてできた人のつながりは、第4回日韓セミナーの実施に向けた協力体制をより強固なものにしていくものと確信しています。

(2) 札幌だより

---2005・夏「溪流・河川横断構造物の切り下げ(スリットを含む)セミナー」報告

松本伸之(応用生態工学札幌 事務担当)

2005年7月、北海道では知床が念願の世界自然遺産に登録されました。ただし、IUCN(国際自然保護連合)からは、知床の世界遺産区域内を流れる河川に治山ダムや砂防ダムがあり、特にサケ科魚類の遡上を妨げているので、今後2年間で対策案を出すようにとの命題を与えられています。

現在このような流域一環の自然環境保全・再生

が、様々な場面で求められています。応用生態工学札幌では、環境への意識の高まり、公共事業費の削減などの社会的背景を考えると、治山ダムや砂防ダムで行われてきたスリット化の取り組みは、河川の落差工・帯工など横断構造物の切り下げに応用の利く技術として注目すべきではないかと考えセミナーを企画しました。

セミナーの様子

そこで、7月19～20日にかけて、道南の切り下げ実施河川を3カ所見学した後、講師によるセミナー、懇親会、泊まり込みという“ハードスケジュール合宿セミナー”を開催いたしました。参加者は約90名。講師には岡部健士教授（徳島大学環境防災研究センター）、柳井清治教授（北海道工業大学環境デザイン学科）、中村太士（北海道大学大学院森林管理保全学講座）の3名にお越しいただきました。

当日の雰囲気をお話しておく、19日朝、札幌からバスでひたすら函館・道南方面へ移動をし、途中分単位での昼食や現地見学をこなすという強行軍が、かえって参加者と講師陣との距離を縮め、結果としてその後セミナーで全体に中身の濃い議論を引き出すことができたのではないかと感じています（皆様お疲れさまでした）。

現地見学

1) 毛敷生川・4号床固工（白老町）

1970年に完成した鋼製ダムの床固工で、2002年に幅2m・深さ3mをスリット化し、地形変化のデータを収集している場所です。データについては室内セミナーで柳井講師から報告がありました。



2) チマイベツ川・治山ダム（室蘭市）

2001年に幅2.65m・深さ1.25mを切り下げしています。



3) 鉛川・No.4 谷止め工（八雲町）

2004年に復旧治山事業として幅5m・深さ3mを切り下げした場所です。



室内セミナー

1) 『切り下げ（スリットを含む）の必要性和現状』：中村太士講師

全国の事例のスライドや、1956年にすでに現在必要とされている考え方を「新河川工法」という本で提唱されていた故・橋本規明教授のエピソードなど交えながらお話いただきました。

「切り下げは治山や砂防ダムの考え方というよりも、これからは構造物をつくる時の大前提として『上流と下流の連続性を保つ』が必要であり、その中で技術を磨いていくしかない」という言葉が印象的でした。また、そのために構造物をつくる際には、後に検証・評価するためにも何故それが必要だったのかデータを残すようにしなければいけないという提案が出されました。

2) 『毛敷生川におけるダムスリット化と土砂移動について』：柳井清治講師

毛敷生川は北海道庁治山課でスリット化の必要性が議論され、試験をするために選定された場所で、スリット化後の日雨量と最大水位や地形の変化、平均粒径などが記録されています。そのなかで毛敷生川のスリット化後の経過は、施工後1ヵ月でほぼ大きな地形が形成され、その後15ヵ月間大きな変化は発生していません。これは毛敷生川の旧河床が非常に堅固で安定的であったため、当初2%の安定勾配を保っていたものが、スリット化することによりダム設置前の勾配である8%前後に回帰したのではないかと報告されました。

また、ログ（丸太）ダムや巨石を配置した構造物など、治山分野で始まっている土砂移動をコントロールする新しい手法が紹介されました。

3) 『スリットを持つ落差工や砂防ダムの流れと河床変動について』：岡部健士講師

徳島県で実際に落差工や床固工のスリット化の設計・計画に携わっている岡部講師からは、様々な事例とともに、実際に河川工学者がスリットをつける場合に留意する点などについてお話いただきました。

実際の付設例のお話はもちろん、屋内での基礎的な実験、スリット付き落差工の簡易設計法、スリット付設に伴う河床変動の数値計算例、モデルによるシミュレーション 3D など河川工学の具体的かつ専門的で貴重な内容に、セミナー終了後も

多くの質問が寄せられました(詳しくは報告書をご覧ください)。

※本セミナーは好評に付き、8月25に(独)北海道開発土木研究所と共催で、室内セミナーのみを札幌で再度開催し、約100名の参加を得ています。

報告書販売のお知らせ

セミナーの現地見学、講演・質疑応答を報告書にまとめました。A4版・36頁・フルカラーに現地の写真、講師が実際に使用したデータ・スライド写真約150点を載せています。

ご希望の方はファックスまたはeメールで。

応用生態工学札幌

(北海道大学大学院森林管理保全学講座内)

TEL: 011-706-2515 FAX: 011-706-4935

E-mail: tabata@for.agr.hokudai.ac.jp(田畑早紀子)

1部: 2000円

(3) 中国現地ワークショップ in 山口参加報告

樋村正雄(国土環境(株))

第2回中国現地ワークショップ in 山口「森・川・海共生プロジェクト - 樺野川流域フォーラム」に参加させていただきましたので、その概要と現地で感じたことをご報告いたします。

今回のワークショップに参加した目論見としては、流域として自然再生事業実施に向けた取り組みが進められている樺野川(「ふしのがわ」と読みます)での事例を見聞し、実際に事業に携わっておられる方々との意見交換をすることでした。生業としていくつかの自然再生事業に関わっていますが、「流域」という看板は掲げるものの、様々な制約の中で結局は地先的な事業に萎縮してしまうことが多い中、流域としての先進的な取り組みが進んでいる樺野川から、何らかのヒントを得たいという魂胆です。

もう一つ、私自身、樺野川には浅からぬ因縁があります。かつて親父の実家が山口市内にあり、子供のころに樺野川で魚を捕ったり、ターザンごっこをしたりして遊んだ思い出をよく聞かされていました。今でも実家のお墓は山口市内にあり、私自身もお墓参りのついでに樺野川で遊んだこともあります。半分地元意識がありますので、名前しか聞いたことが無いような川に行くのとは気合いの入れ方が違います。

さて、初日(8月26日(金))は現地見学会です。12:00に新山口駅に集合し、少し秋の気配を感じさせる空のもと、バスを連ねて出発しました。まず樺野川河口右岸の「きらら浜自然観察公園」に向かいました。道中、樺野川河口干潟の抱える問題の説明があり、細流土砂の流入による湾内の底質の泥化、アサリ漁獲量やアマモ場の減少などの課題に対して、底質改善などの事業を行っているとのことでした。

きらら浜観察公園のビジターセンターでは、野鳥の観察をしたり、目前の干潟に住む生き物の生態について勉強できるようになっています。特に、干潟の生き物の代表としてカブトガニに関する情報が充実しており、生きた卵や生まれたばかりの幼生が水槽展示されていました。子供のころは、阿知須の浜辺で海に放り投げたりして遊んでいたのですが、いつの間にか貴重な存在となってしまったようです。

河口を見た後は、川を一気に遡って樺野川源流部の「四季の森植樹現場」の見学です。現場では源流を守る会の岡事務局長より、源流部の産廃施設計画からその中止、現在の住民ボランティアによる植樹にいたるまでの経緯や、その過程で生まれた地域通貨「フシノ」についての説明がありました。

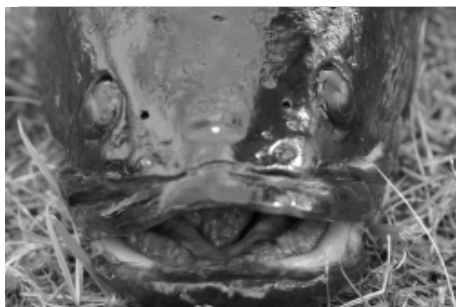
源流部から川の流れて一緒に樺野川を下ってしばらく行くと、樺野川の水をそ



のまま利用した「夢の椀プール」があります。このプールが出来、子供たちが川の水で泳ぐということで、上流部の農業廃水処理が一気に進んだ経緯について説明がありました。また、このプールの清掃活動の対価として、地域通貨「フシノ」が初めて使われたとのことでした。バスからの眺めで、プールの中だけでなく、川に降りて遊ぶ子供が多かったのが印象的でした。

途中、仁保道の駅で小休止した後、樺野川中流部で樺野川漁協の森脇組合長から漁協の流域保全に関する取り組みのお話をいただきました。樺野川では外来魚対策としてブラックバスやライギョの買い取りを行っているそうで、この買い取りに

も地域通貨「フシノ」が使われているとのことでした。この対策はある程度効果を発揮しており、榎野川中流域では、ブラックバスの大型個体は減少しているとのことでした。また、この日買い取った外来魚として、大型のライギョ（迫力十分でした）と中型のブラックバス数尾を見せて頂きました。



榎野川中流から、再び川を横目に見ながら下流に向かい、翌日のワークショップ会場でもある山口県セミナーパークに到着して、この日の現地見学会は終了です。夕方からはセミナーパーク内でお楽しみの交流会です。そこかしこに人の輪が出来、活発な意見交換がされていました。

明けて27日(土)はワークショップの本番です。

山口大学の関根先生から「実例に則して自然再生の流れを概観した上で、その背景となる様々な技術的・生態的な考え方について議論しよう」との趣旨説明からスタートしました。

講演内容は実にバラエティに富んでおり、山口県環境政策課の山野主査からの「やまぐちの豊かな流域づくり構想(榎野川モデル)」という全体構想のお話を皮切りに、「水質浄化」、「ホテル復元」、「ビオトープの造成と問題」、「川との関わり：流域マップの作成」、「干潟づくり」、「アマモ場再生」など、森・川・海を舞台に様々な分野・立場からのご講演がありました。

また、これらの議論を大きくまとめるテーマとして、広島大学の山本先生から「瀬戸内に見られ

る人為的貧栄養化減少」、四日市大学の松永先生より「山と海とのかかわり」の2件の特別講演をいただき、最後は山口大学の浮田先生による司会で、山本先生、松永先生をパネラーとした総合討論が行われました。



各ご講演、総合討論では活発な議論が行われましたが、少し残念だった点としては、せっかく多士済々の講演者をそろえていたのですから、最後は講演者みんなで「森・川・海の共生」をテーマにディスカッションを行った方が、より深い議論が出来たのかなあと思います。

若干、個人的な感想ですが、榎野川流域での取り組みがうまくいっている理由として、人の流域への「意識」が強いこと、もう少し言うと、流域の人が当事者意識を肌で感じていることがあるのではないかと感じました。これは、地域通貨である「フシノ」の流通や、榎野川流域マップの作成、流域フォーラムの開催など「流域」に対する強い動機付けが積極的になされていることが土台となっているように思います。

また、現地見学会の時に「夢の椀プール」の建設が契機となり、上流部の農業廃水処理が一気に進んだ経緯が強く印象に残りました。森・川・海を含む環境の問題が進まない理由の一つとして、自分たちの問題として実感しにくいことが一面ではあると思います。プールが出来たことにより、「子供たちが泳ぐ」⇒「水を飲むかもしれない」⇒「そりゃいけん。水をきれいにせんにゃー」という「実感」が生まれたことにより、それが対策や合意形成に直結した好例だと思います。これからの自然再生を進める上での大きなヒントになるのではと思っています。

さらに、現地見学会での植樹のお話や、ワークショップでの里山ビオトープのお話を聞くにつけ、目標に「見た目」や「人を呼べること」が重視さ

れる風潮があることに象徴できるように、自然再生の意志決定の過程でスポンサーや地元の人々の思いが強く反映されているのが現状のようです。もちろんこれは悪いことではないのですが、自然再生のそもそも論、「この川の自然としてどんな環境がふさわしいのだろう」という議論にもっと「学」の分野ががんばっても良いように感じました。

翌日は、釣り竿を持って榎野川に改めてご挨拶に行きました。やはり川を知るにはこれが一番。アユやカワムツ、コイなどが出迎えてくれました。人の生活の臭いを強く感じさせながら、間違いなく榎野川は生きていますと実感できました。親父の思い出のほんの一部ですが、引き継げたような気分です。

これからも榎野川における様々な取り組みが進められることによって、さらに次の世代まで引き継げるものが保たれ、生まれることを期待しています。

8 韓国での動き

大韓土木学会 生態工学分科
設立記念シンポジウム

韓国建設技術研究院
水資源環境研究部/河川グループ
生態工学博士/前任研究員
安 洪 奎(Ahn Hong-Kyu)

さる2005年6月29日(水)、韓国では大韓土木学会主催で生態工学分科設立の記念シンポジウムが開かれた。シンポジウムの参加者は130人を越え、土木分野においても生態工学に対する関心が深いことを表していた。この日のタイトルは“なぜ土木技術者は生態系の構造と機能を理解しないとイケないのか?”であった。



大韓土木学会生態工学分科長である Woo Hyoseop(韓国建設技術研究院)博士の講演のほか、環境部と建設交通部の課長ら、国土研究院、民間

会社のエンジニアが建設分野での生態工学、その疑義と適用、政策方向などに対して討論が行われた。

このシンポジウムで出された大きな二つの結論は以下のとおりである。

1. 我々が追求する生態工学の定義は、人間と自然環境の共存のための人間社会の設計技術：具体的には人間活動による生態系への影響の回避(avoidance)、低減(reduce)、復元(repair)、再生(replace)技術と生態系の構造と機能を利用した水士壤廃棄物などの浄化技術を含む。したがって、“生態工学は ESSD(Environmentally Sound and Sustainable Development)の実践の道具である。”
2. 生態工学の方向は社会の要求(Needs)を考慮しアメニティの増進も含め、長期的には人間社会と生態システム共存のための技術開発に焦点を合わせる。

(事務局注：原稿を寄せてくださった安博士、文中のWoo博士はいずれも応用生態工学会の会員です。)

9 日本学術会議について

日本学術会議は平成16年4月に公布された「日本学術会議法の一部を改正する法律」の施行により本年10月1日から新体制となりました。また、1. 個別の学術研究団体の利害にとらわれない政策提言のための会員選考方法の変更、2. 新分野・融合分野の出現に柔軟・的確に対応するため7部制から3部制へ、3. 緊急の課題・新たな課題に柔軟・迅速に対応するため研究連絡委員会を廃止し連携会員を新設、4. 総合科学技術会議との連携のため所管が総務大臣から内閣総理大臣へと改革がおこなわれました。

これらの改革に伴い、これまで当学会は「学術研究団体」として日本学術会議に登録していましたが、この制度が廃止され法律上の記載がなくなりました。新たに公的で対等な協働関係を求める「日本学術会議協力学術研究団体」の制度が設けられ、当学会も申込書を提出しました。

日本学術会議の会員はこれまでどおり210名からなり、10月1日発足の第20期では当学会会員の大垣眞一郎東京大学教授が副会長に就任され、また、元理事の鷺谷いづみ東京大学教授が会員になっています。

10 NPO 法人応用生態工学会始動

平成17年7月7日に設立したNPO 法人応用生態工学会は、当面「応用生態工学」論文作成をバックアップする活動を行うべく準備をしています。

行政やコンサルタント等の現場技術者にとって、各種業務で実施した内容を「報告書」ではなく「投稿論文」(原著論文・事例研究・短報など)にすることは不慣れな面があると思われます。応用生態工学会の学会誌「応用生態工学」編集委員会に投稿された原稿についても、内容の問題ではなくスタイルの問題として返送した事例があるとお聞きしています。

一方、応用生態工学の発展のためには、各地での事業における取り組みにおいて得られた情報を共有し、仮説設定-検証型の試行錯誤を効率的に行ってゆくことが求められており、また、そのためには多くの人の目に触れることが出来る学会誌等への投稿・掲載が効果的と思われる。

そこでNPO では当面、1)「指導セミナー開講」および2)「論文作成希望者」に対して「指導協力者」を紹介するといった活動を行ってゆく予定です。

応用生態工学会の全面的な協力をいただき、学会のネットワーク及びホームページなどのツールも使わせていただきます。

「応用生態工学論文作成指導セミナー」ご案内

日時：平成17年12月15日(木) 13:00-16:00

場所：(財)リバーフロント整備センター会議室
受講料：無料

定員：30名(定員になり次第締め切ります。)

対象：主として「応用生態工学」に投稿する意思と材料を持っている現場およびコンサルタントの技術者

申し込みはNPO 法人応用生態工学会事務局(応用生態工学会内) 島崎まで。

TEL 03-5216-8401 FAX 03-5216-8520

e-mail see@blue.ocn.ne.jp

(件名に「論文作成セミナー」とお書きください)

11 新刊紹介

「希少淡水魚の現在と未来 - 積極的保全のシナリオ」片野修, 森誠一 監修・編

「本書では、希少魚の生態と保全活動にかかわってきた方々にその対象魚について執筆していただき、希少魚を保全するためのシナリオをつくり



あげようとした。依頼した執筆者の多くは、何年も、場合によっては何十年もその生息地において希少魚に向き合ってきた。その一つの柱は、水産庁の事業の中で各地の希少魚研究に取り組んできた水産試験場の職員たちである。次

いで大学で最先端の知識と技術を磨き、希少魚に取り組んでいる新進気鋭の研究者にも加わってもらった。そして誰よりも希少魚を愛し、地域に即した活動をしている住民グループや、日常的に淡水魚にかかわって生活している方々にも原稿をお願いした。その彼らの「生」の体験と苦勞を読者に伝えるのも本書の目的である。(「序」より)

【出版社】 信山社

【価格】 4,500円(消費税別)

【サイズ】 A4判変形 416ページ

【ISBN】 4-7972-2579-3

12 今後の行事・募集案内

今年度の学会主催の行事はほぼ終了いたしました。来年の予定を含めて紹介します。

1) 【募集予定】2006年度海外交流研究者派遣

交流委員会により International Conference on "Riverine Hydroecology: Advances in Research and Applications" (2006/8/14-18, Stirling, Scotland) への参加に対する助成を中心に検討しています。募集要項は間に合いませんでしたので、学会ホームページおよび次号にご注意ください。

2) 【共催行事】「東アジアにおける生態系の修復」に関する国際会議

英文誌を共同発行している ICLEE の主催で 2006/6/16-18 に大阪で開催します。12月中旬に 2nd Circular が公開される予定で、仮登録の締め切りは 2006/1/16 です。参加費は早期入金の割引もありますので、早めにご検討、お申し込みください。詳しくは下記をごらんください。

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsrt/ICLEE/index.htm>

3) ICEM2006: 国際生態モデリング学会

2006/8/28-9/1 山口大学

詳細は同封のチラシおよび下記をご覧ください。

<http://icem2006.civil.yamaguchi-u.ac.jp/>

[2005年11月18日現在会員数]

正(学生)会員

1,213名

賛助会員

53法人(81口)